「総合的な学習の時間」をリファインしよう！

Refine

学校・地域をもっと元気にする14のポイント

Points

総合的学習リファインフォーラム
実行委員会

はじめに

実行委員長
岩﨑 保之
（新潟青陵大学）

新しい学習指導要領は、「新しい時代に必要となる資質・能力の育成」を目指し、社会に開かれた教育課程やカリキュラム・マネジメントの実現を各学校に求めています。

そうした文脈において、教育課程のコアとなるのが「総合的な学習の時間」（以下「総合的学習」と表記）であることは論をまたないでしょう。しかしながら、新しい教科への対応や勤務の多忙化などにより、総合的学習については後回しになっている学校もあることと思います。

この冊子は、そうした学校にお勤めの先生方や地域コーディネーター（新潟市：地域教育コーディネーター）の皆様、学校とともに歩みたいと願っている地域の皆様に対して、総合的学習を再び活性化（リファイン）するポイントを提案するために作成しました。総合的学習に関心のある先生方、地域（教育）コーディネーターの皆様、学校を支えている地域の皆様などに集まっていただき、質問紙調査の分析結果や小・中・高校の実践事例を共有した上で、ファシリテーションの手法を用いて5つのテーマ別に生成的対話を行った「総合的学習リファインフォーラム」の様子と成果を収めています。

「みんなで総合的学習を盛り上げていこう！」という会場の熱気と参加者の英知を感じ取っていただけたら幸いです。

総合的学習リファインフォーラム実行委員会 ※（　）内は所属

岩﨑保之（実行委員長・新潟青陵大学）、佐藤靖子（新潟市立中野小屋中学校）、宮﨑威治（新潟市立白南中学校）、山本寛（新潟県立新潟南高等学校）、金洋輔（五泉市教育委員会）、青田美香（新潟市立早通中学校）

運営支援 ※（　）内は所属・冊子執筆部分

小見まいこ（特定非営利活動法人みらいずworks・テーマセッション④）、角野仁美（同・フォーラム概要、テーマセッション②）、上山晃平（新潟大学学生・テーマセッション③、参加者の声）、河合祥希（同・テーマセッション①）、丸田塁（同・開かれたパネルディスカッション）、長澤利紀（株式会社博進堂・写真、テーマセッション⑤）、成田倫史（特定非営利活動法人まちづくり学校・写真）

Contents

目次

総合的学習をリファインして学校をもっと元気にしよう！フォーラム　概要　2

学校と地域の連携・協働に関する調査研究
－総合的学習をリファインするモデルの構築に向けて－ ・・・・・・・・・・ 3

開かれたパネルディスカッション①
事例紹介 ・・・・・・・・・・ 7

開かれたパネルディスカッション②
ゲストフリートーク ・・・・・・・・・・ 8

テーマセッション①
教科での学びを活かし、総合的学習で「深い学び」をどうつくるか ・・・・ 10

テーマセッション②
総合的な探究に向けて、高校の総合的学習をどう活性化していくか ・・ 12

テーマセッション③
総合的学習を核に小中高連携を進めていくために必要なことは何か ・・ 14

テーマセッション④
教員と地域（教育）コーディネーターでどう役割分担していくか ・・・・・・ 16

テーマセッション⑤
学校と地域がwin-winになる総合的学習をつくるために、
どんなプロセスが必要か ・・・・・・・・・・ 18

フォーラム参加者の声 ・・・・・・・・・・ 20

Forum

総合的学習をリファインして学校をもっと元気にしよう！フォーラム　概要

総合的学習を再活性化（リファイン）する中で、教員・地域（教育）コーディネーター・地域が協働しながら学校が元気になるモデルを参加型で明らかにすることを目的として、「総合的学習リファインフォーラム」を開催した。当日は、教員、地域（教育）コーディネーター、NPO・企業・行政・大学の職員や学生など多様な立場の参加者が集い、総合的学習のリファインに向けた知恵を出し合った。

日　時：2018年2月18日（日）
13:00〜17:00
会　場：新潟青陵大学１号館
参加者：58名

Program フォーラムの流れ

1 オリエンテーション

2 導入ワーク

自己紹介の後、「最近あったよいこと・この場に期待すること」を共有。元気よくハイタッチをし、参加者どうしが交流を重ねた。

3 研究発表、問題提起

岩崎 保之 氏
（新潟青陵大学）

P3へ

4 感想シェア＆課題抽出

参加者が「総合的学習を進めていく上での悩み・ゲストの皆さんに聞いてみたいこと」を付せん紙に記入し、回収。

5 開かれたパネルディスカッション

①事例紹介「総合的学習をリファインするヒントを各現場から探ろう！」 P7へ

②ゲストフリートーク P8へ

6 テーマセッション

各自が関心のあるテーマに集い、総合的学習の理想と現状、そしてそのギャップを埋めるポイントについて知恵を出し合った。 P10へ

7 プレゼンタイム

8 ふりかえり

Reseach Studies

学校と地域の連携・協働に関する調査研究

－総合的学習をリファインするモデルの構築に向けて－

岩﨑 保之（新潟青陵大学）

1 調査の目的

新しい学習指導要領における「社会に開かれた教育課程」は、学校と地域が従前以上に連携・協働することで実現される。

学校と地域のニーズやシーズをつないで単元を開発することで、総合的学習の学びはより一層、真正なものとなる。

いわゆる“前年度踏襲型”を脱し、総合的学習をリファインするモデルを構築するための基礎資料を得ることを目的として、質問紙調査を実施した。

2 調査の概要

対象：新潟県内の公立義務教育諸学校748校
　A　総合的学習の主任を務めている教員
　B　地域（教育）コーディネーターの職務・役割を担っている職員・学校関係者
手続：校長通しによる自記式質問紙調査
時期：2016（平成28）年3月〜4月
有効回収率：①48.3%（n=361）、
　②30.5%（n=228）
倫理：本務校の倫理審査を受審した。

3 調査内容

大問レベルの設問内容を以下に示す。順序尺度には5件法を用いた。

A　総合的学習の主任教員
・学校の状況（15問）
・学校と地域の連携・協働の状況（10問）
・総合的学習の取組状況と同学習に対する意識（5問）

B　地域（教育）コーディネーター
・学校や地域の状況（13問）
・活動の状況（11問）
・総合的学習の様子（4問）

4 主な調査結果

A　総合的学習の主任教員

（1）回答者の属性

小学校60.1%、中学校34.6%、中等教育学校0.6%、特別支援学校4.7%であった。

職位は、教頭4.4%、主幹教諭0.8%、教諭93.4%、その他0.8%、無回答0.6%であった。

地域（教育）コーディネーター等の職員や学校関係者が活動している学校は55.4%、活動していない学校は37.7%であった。

（2）学校と地域の連携・協働の状況

主因子法による因子分析の結果、18項目からなる3因子構造が得られた。

【児童生徒の変化】自分自身の将来や生き方について考える児童生徒が増えた、など。

【地域の変化】地域住民や団体からの協力が得られやすくなった、など。

【教職員の変化】地域の行事に参加したり、地域に関心を示したりする教職員が増えた、など。

（3）総合的学習に対する意識

総合的学習における児童生徒や教員の様子（全11項目）を、複数回答でたずねた。

その結果、児童生徒どうしが協同して問題を解決しようとする様子が見られた（70.1%）、児童生徒どうしが言葉を使って活発に話し合い、資料を分析したり、まとめたり表現したりする様子が見られた（63.4%）、地域の住民の協力を得る場面が、多くあった（57.3%）、自然体験やボランティア活動などの社会体験が、積極的に行われていた（51.8%）といったように、多くの学校の総合的学習で、児童生徒が協同的で活発に学習したり、教員が地域住民の協力を得ながら体験的な学習を進めていたりして

いる状況が示唆された。

また、総合的学習に対する意識をたずねた設問（全25項目）を主因子法により因子分析した結果、16項目からなる3因子構造が得られた。

【肯定的意識】教科の枠を超えた横断的・総合的な課題について学習できる、など。

【否定的意識】文部科学省で、指導内容や学習活動を明確に示すべきである、など。

【課題意識】「総合的な学習の時間」の取組は、マンネリ化している、など。

(4) 総合的学習を充実させる要件

前述した「学校と地域の連携・協働の状況」と「総合的学習に対する意識」の相関係数は、1%水準で有意であった。

総合的学習に対する意識3因子の下位尺度（全16項目）の平均値に基づいて標本を高群と低群に分け、群間比較を行った。

その結果、総合的学習をリファインするために有効であると示唆される**【地域との連携・協働の課題】【ボランティア活性化の工夫】【地域（教育）コーディネーターとの連携・協働】**に関する要件を5ページに示す。

B　地域（教育）コーディネーター

(1) 回答者の属性

小学校64.5%、中学校29.4%、中等教育学校0.4%、特別支援学校1.8%、複数回答3.9%であった。

地域（教育）コーディネーターとしての立場は、教育委員会等の公的機関から委嘱を受け非常勤の職員として活動している63.4%、教育委員会等の公的機関から委嘱を受けボランティアとして活動している13.6%、公的機関から特に委嘱を受けてはいないがボランティアとして活動している8.8%、その他14.1%であった。

活動期間の平均は、50.7（±31.7）か月であった。

(2) 地域（教育）コーディネーターとしての手応え

17項目からなる4因子構造が得られた。

【児童生徒の変化】学校のルールを守る児童生徒が増えた、など。

【教職員の変化】地域の行事に参加したり、地域に関心を示したりする教員が増えた、など。

【全般的な手応え】自分がコーディネートしている学校に貢献している、など。

【地域住民の変化】学校に協力的な住民が増えた、など。

(3) 総合的学習に対する意識

主因子法による因子分析の結果、14項目からなる3因子構造が得られた。

【肯定的意識】自然体験や社会体験など、様々な体験活動を行うことができる、など。

【課題意識】文部科学省で、育成すべき資質・能力を明確に示すべきである、など。

【教職員の取組に対する意識】教職員は、地域（教育）コーディネーターの意見や要望をきいたり、とり入れたりしながら取り組んでいる、など。

(4) 総合的学習を充実させる要件

総合的学習に対する意識3因子のうち、肯定的意識（4項目）と教職員の取組に対する意識（3項目）の平均値に基づいて標本を高群と低群に分け、群間比較を行った。

その結果、総合的学習をリファインするために有効であると示唆される**【日常の役割】【学校の要望の把握方法】【ボランティア活性化の工夫】【総合的学習での役割】【課題】**に関する要件を6ページに示す。

5 考察

教員が地域や地域（教育）コーディネーターと日頃からコミュニケーションを密にしている学校ほど、総合的学習の取組も活性化していることが示唆された。

今後は、教員と学校関係者や地域住民とが理念を共有し、役割を分担する「熟議」（文部科学省）をより一層充実させることで、総合的学習を活性化させることが期待できる。

A　総合的学習をリファインする要件Ⅰ ―教員（「総合的学習」主担当）調査より

【地域との連携・協働の課題】

- □ 地域の連携・協働に関する学校の方針が明確でない（χ^2=39.42, *df*=24, *p*<.05）
- □ ボランティアが固定していて、新しいボランティアが確保できない（χ^2=38.41, *df*=24, *p*<.05）
- □ 近隣の学校との連携や情報の共有ができていない（χ^2=36.46, *df*=24, *p*<.05）

【ボランティア活性化の工夫】

- □ 隣接する学校と連絡を取り合い、情報を共有した（χ^2=11.38, *df*=1, *p*<.001）
- □ ボランティアの核となる人材を育成した（χ^2=6.67, *df*=1, *p*<.01）
- □ 地域の各種団体の会合や事業所等を訪問し、学校でのボランティア活動を説明・PRした（χ^2=4.39, *df*=1, *p*<.05）
- □ 「○○学校サポーター制度」のようなボランティア登録システムを整備した（ χ^2=4.37, *df*=1, *p*<.05 ）

① “足で稼ぐ” という方針を掲げる
② ボランティアの “裾野（量）” と “コア（質）” を育む
③ 近隣の学校と情報を共有するシステムを作る

【地域（教育）コーディネーターとの連携・協働】

- □ 地域（教育）コーディネーターと一緒に、学校と地域の連携・協働に関する研修会を開いた（χ^2=7.507, *df*=1, *p*<.01）
- □ 年度当初、地域（教育）コーディネーターと一緒に年間を見通して「ボランティア活動計画」等を作成した（χ^2=7.507, *df*=1, *p*<.01）
- □ 地域（教育）コーディネーターの活動スペースが確保されていないという課題がある（χ^2=6.196, *df*=1, *p*<.05）

④ 地域（教育）コーディネーターと一緒に「研修」「計画」し、活動場所を確保する

【文献】岩﨑保之（2018）「『総合的な学習の時間』活性化に向けた学校と地域との連携・協働に関する調査研究」『新潟青陵学会誌』第11巻第1号、新潟青陵学会、所収

B　総合的学習をリファインする要件Ⅱ ―地域(教育)コーディネーター調査より

【日常の役割】

- □ 地域のイベント情報や、地域からの提案・要望等を学校へ伝達した(χ^2=8.44, df=1, p<.01)
- □ 学校の要望に基づく、ボランティアやゲストティーチャー等を、発掘・確保・依頼した(χ^2=4.18, df=1, p<.05)

【学校の要望の把握方法】

- □ 教職員と日常的に話をして把握した(χ^2=17.48, df=1, p<.001)

【ボランティアの活性化の工夫】

- □ <u>年度当初、学校の教職員と一緒に年間を見通して「ボランティア活用計画」等を作成した</u>(χ^2=4.18, df=1, p<.01)
- □ 大学やNPO等の有識者から専門的知見を得たり、助言を得たりした(χ^2=5.67, df=1, p<.05)
- □ ボランティアの説明会や講演会を開いて、地域住民のボランティア意識を高めた(χ^2=4.10, df=1, p<.05)
- □ <u>他校の地域(教育)コーディネーターと連絡を取り合い、情報を共有した</u>(χ^2=5.39, df=1, p<.05)

※　二重下線の2項目は、教員調査と同様の結果

【「総合的学習」での役割】

- □ 校外に出かける際、安全管理をするボランティアを募った(χ^2=13.01, df=1, p<.001)
- □ 特別な支援を必要とする児童生徒のためのボランティアを募った(χ^2=7.16, df=1, p<.01)
- □ 講話や技術指導をするゲストティーチャーを探して依頼した(χ^2=6.94, df=1, p<.01)
- □ 教職員と一緒に、年間指導計画を検討した(χ^2=16.77, df=1, p<.001)
- □ 教職員と一緒に、地域教材や地域の学習環境を検討した(χ^2=18.69, df=1, p<.001)
- □ 教職員と一緒に、成果や課題を検討した(χ^2=18.51, df=1, p<.001)
- □ 「総合的学習」の取組を、お便りやホームページで発信した(χ^2=5.28, df=1, p<.05)

⑤　教員と一緒に、総合的学習をPDCAサイクルでマネジメントする

【課題】

- □ 学校を地域社会に開くことに対して、抵抗感を示す教職員が多い (χ^2=12.14, df=1, p<.001)
- □ 地域(教育)コーディネーターの役割や位置付けが、学校内で明確になっていない (χ^2=10.08, df=1, p<.01)
- □ 保護者・地域住民の間で、地域(教育)コーディネーターの認知度が低い(χ^2=10.91, df=1, p<.01)
- □ 地域との連携・協働に関する学校の方針が明確でない(χ^2=8.60, df=1, p<.01)
- □ 教職員が多忙で、充分に打合せができない(χ^2=8.34, df=1, p<.01)
- □ 学校側に窓口となる教職員がいない(χ^2=4.68, df=1, p<.05)
- □ 地域(教育)コーディネーターとしての意見・要望について、学校に対応してもらえないことが多い (χ^2=5.57, df=1, p<.05)

⑥　「社会に開かれた教育課程」実現に向けた意識を高める

【文献】岩崎保之(2017)「『総合的な学習の時間』再活性化に向けた地域コーディネーターの役割・機能に関する調査研究」『発表要旨集録』日本カリキュラム学会第28回(岡山大学)大会、所収

Case Study

開かれたパネルディスカッション①

事例紹介

リアル×コラボ＝リファイン

金 洋輔 氏
(五泉市教育委員会)

金氏からは、総合的学習をリファインするための視点として「リアル×コラボ」が提起された。実社会に内在する「リアル」な問題を探究課題に据え、その問題の解決を願い、活動する「本気の大人」と子どもたちがコラボするという考え方である。伝統野菜の寄居かぶに関する実践では、かぶの食べ比べや農家へのインタビューを行い、地域の魅力を再発見するための授業を行った。その結果、子どもたちは情報収集能力を身につけるという一定の成果を得たが、金氏にとってそれだけでは「物足りなさ」があった。そこで、「寄居かぶは売れていないため、なくなるかもしれない」という新たな問題を子どもたちにぶつけた。すると、子どもたちは、大好きなかぶを守るために様々な提案をして、地域と連携しながら、伝統野菜のよさを伝えるための活動にまで発展させた。こうして、子どもたちは課題解決能力を身につけたのである。

金氏は、子どもが地域課題に直面し、本気の大人と出会うことが大切だと語った。しかし、教員一人で行うのには限界があり、「誰かと協働して授業を作ることが大切だ」というメッセージも送られた。

全員で取り組む総合的学習で生徒の心に灯をともす

山本 寛 氏
(新潟県立新潟南高等学校)

山本氏が担当する1学年では、総がかりで総合的学習に取り組んでいる。総合的学習を進める際、教員にとっては「誰が」「いつ」「何を」を行うのかが悩み事である。そこで、学年会では総合的学習の趣旨と目的を共有した。教員全体で取り組む雰囲気を醸成したところ、アイデアが次々と挙げられた。体育館を使って、学年の教員全員が学問の魅力をゼミ形式でプレゼンする実践や、生徒同士が考えを交流する場面を設けた実践を行った。総合的学習の趣旨を共有し、やり方を教員個人の裁量に委ねたことで、教員が自分自身の専門性を生かし、工夫しながら取り組むことができた。生徒は体育館を自由に回って、教員の発表を聞いたり、仲間と交流したりすることで、自分の興味を見定めたり、高校と大学の学習のつながりを感じたりすることができた。冬休みには、興味のある分野を調査し、同級生に問題提起することで、生徒同士が主体性をもって関わり合いながら学ぶことができた。

山本氏からは、総合的学習を通して生徒と教員が全員参加することの重要性と、その結果として生徒の心に灯がともることの大切さが紹介された。その一方で、「高校と地域がどう連携していくか」といった課題があることも指摘された。

地域を支える生徒を育む総合的学習

宮﨑 威治 氏
(新潟市立白南中学校)

宮﨑氏が語ったのは、「地域を支える生徒を育む総合的学習」である。防災教育の事例では、まず、中越地震の際に避難の指揮を執った方から、当時の震災の状況や地域を守った若者が活躍した話をうかがった。生徒は、「中学生は地域を守る存在」であることを知り、防災への当事者意識が高まった。次に、全校縦割り班で4つの防災施設に分かれて研修を受け、それぞれの学びを共有した。さらに、専門家を交え、これまでの学びを基に、日常から自分たちができることを時系列順にまとめたり、地域への提言などを考えたりした。水害や原発事故のリスクが高い地域であることから、それらの災害についても専門家の講義を受けた。最後に、まとめとして、防災ハンドブックを地域住民や地域教育コーディネーターと連携して作り、地域住民に配布した。このような活動を通して、生徒は災害時に自分の役割があることを自覚し、自信や高い防災意識を身につけることができた。住民の防災訓練の参加率が上昇したことから、地域の防災意識も向上したと言える。このように、学校と地域の願いが合致したwin-winの取組によって、地域を支える生徒を育んでいるのである。

Free Talk

開かれたパネルディスカッション②

ゲストフリートーク

参加者が抱える「総合的学習を進めるうえでの悩み」を基に、
パネルディスカッションを行った。

●ゲスト
- 金 金 洋輔 氏（五泉市教育委員会）
- 山 山本 寛 氏（新潟県立新潟南高等学校）
- 宮 宮﨑 威治 氏（新潟市立白南中学校）

●コメンテーター
- 岩 岩﨑 保之 氏（新潟青陵大学）

●ファシリテーター
- 小 小見 まいこ 氏（NPO法人みらいずworks）

参加者からの

Q1 総合的学習を進めていくうえで、教員のマンパワーが足りません。どうしたら、教員のモチベーションを高めることができますか？

山　まずは自分自身が楽しくやることが大切です。「やってください」ばかりでなく、楽しくやる姿を見てもらいながら「一緒にやりましょう」と声をかけて巻き込むようにしています。

宮　私はそれに加えて、「教員自身に新たな発見や学びがある」ということも大切だと思います。

金　僕の場合は、他の教員と一緒にやるのに苦労しました。その中で、うまくいったことが、2 つありました。1 つ目は、最初は自分が先頭でやっていって、だんだん他の教員にも委ねてやっていくこと。もう 1 つは、子どもの姿が総合的学習を通して変わっていくことです。子どもの姿が変わると、他の先生方から、「ちょっと（ 総合的学習の ）授業のやり方教えてよ」と言われることもありました。

岩　地域と連携して授業を行う上で最も苦しいのが、人的・物的な地域資源の開拓です。
　しかし、教員一人では限界があるので、近隣の学校や地域（教育）コーディネーターと役割を分担・共有し、補い合っていくことで先生方の負担が減るのではないでしょうか。
　また、保護者や地域の方がもっと先生方を褒めてくださると、先生方が一歩踏み出すきっかけにもなると思います。

参加者からの

Q2 教員の負担を減らすカギとなる地域(教育)コーディネーターとは、どのようにつながればよいのでしょうか。また、その時のポイントは何ですか？

宮　私は企画する時に地域（教育）コーディネーターから直接アドバイスをいただくようにしています。防災マップをつくった際に、「“保存版” と入れると地域の人たちにずっと大切に使ってもらえるよ」とアドバイスをいただき、なるほどと思いました。

金　地域（教育）コーディネーターからのアドバイスは本当に重要ですね。
　単元をつくるために必要な「リアルな地域の課題って何ですか」とか「本気の大人って誰ですか」ということについて、地域（教育）コーディネーターから情報をいただけるとすごく助かりますね。

小　地域(教育)コーディネーターのいない高校はどうすればよいでしょう？

山　まずは地域と関わる総合的学習の在り方を考える必要があります。高校が手を回しにくい「地域とどう関わっていくか」という点から地域（教育）コーディネーターと連携できるとよいと思います。

岩　教員だけでは限界がありますね。ボランティアバンクを整えている学校であっても、実際は人脈や人づてによるところが大きいです。「子どもと一緒に単元を伴走してくれる大人を、どれだけ捕まえておけるか」がカギです。特に、高校の場合は単元の専門性が高まるので、外部人材の見極めが必要です。

参加者からの

Q3 総合的学習の課題設定はどのようにしますか？

金　「リアル」が探究課題になっていきますが、例えば、環境学習の際、教員は意外とその地域で何が問題になっているか答えられません。その地域の環境で、何が解決すべき問題なのか、その段階まで踏み込まないと課題設定はできません。また、その問題を子どもたちが取り組むべき問題だと認識するには、授業力が必要です。
　例えば、子どもたちは初めから、寄居かぶが気になっていたわけではありません。食べて、調べて、作っている人の話を聴いて、かぶが大好きになった時に問題に出合わせるから、「放っておけない」となるのです。
　理想状況と問題状況とを、うまく対比させることが大切です。

小　地域に必要な課題を学習課題にする際、どんな工夫をしていますか？

宮　現代的な課題というのは、生徒だけではなく、地域にとっても重要なものです。生徒がそうした問題を探究して地域に発信すると、反応が返ってきます。すると、生徒は「自分がやったことが役に立ったから、もう少しやってみようかな」と思うわけです。

山　高校では、「高校生として取り組む価値のある」課題設定をすることが大切です。生徒の素朴な疑問を教員がかみ砕いて、身近なテーマにして考えさせるのがお薦めです。例えば、本校の SSH（スーパーサイエンスハイスクール）では、クマムシの研究をしている班があります。仮死状態にしても復活する興味深い生物なのですが、課題研究を通して「生命の不死は可能か」ということを考えるなど、学問や実社会と結びつけることが必要だと思います。

岩　皆さんのお話をうかがって、総合的学習を実践する先生は「センサー」と「フィルター」を研ぎ澄ます必要があるように感じました。センサーとは、課題を感じ取り、子どもが取り組むべき問題だと判断する力のことです。フィルターとは、学習目標と合うように、子どもや地域の実態に合わせて問題を学習材に変えていく力のことです。
　また、人が好きでなくてはならない。自分も本気でその問題に取り組み、その人の「本気」を感じることが大切です。

参加者からの

Q4 教員が異動になった時に、校長や教頭のリーダーシップのもと、総合的学習をどうマネジメントしていけばよいですか？

金　ある教員が転出した途端に実践できなくなるのは、よくないと思っています。そのためには OJT（On-The-Job Training）が必要だと思います。孤軍奮闘するのではなく、後輩を育てたり、仲間と一緒に進めたりすることが大切です。

宮　総合的学習の中でも現代的課題というのは常に変化するので、温め直しがききません。ノウ・ハウというのはデータで蓄積されてきているので、それを用いて新たな課題に取り組めばよいと思います。

山　学校では、問題意識がその時その場限りになってしまうことがあります。ですから、振り返りと記録をしっかりと残すことが大切です。その一方で、その時々の現代的な課題に対応するため、スクラップ＆ビルドの視点から、今必要なことに新たに着手するのもよいと思います。

岩　教員は風、地域は土と言われますが、教員は風のように種を運んできて去っていってしまう。その種を受け取り、育むのは地域です。だから、教員と地域が同じ方向を向くことが大切です。熟議によってベクトルを合わせ、教員がまいた種を地域で育て、次の風に備えます。そうすることで、総合的学習がリファインされていくのではないでしょうか。

Theme 1

教科での学びを活かし、総合的学習で「深い学び」をどうつくるか

「深い学び」については、探究的学習によって各教科で身につけた「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力を活用・発揮する学習場面を何度も生み出すことが期待される。しかしながら、現状は総合的学習が効果的に各教科と結びつけられていないことも多い。このセッションでは、地域・児童生徒・教員間でコミュニケーションを密に取っていくことが教科間の連携や地域との連携につながるということ、授業の中で社会とのつながりを意識することが大切であるということを整理することができた。

Present situation

現状

- 教科を主軸としたテーマ・課題設定になっておらず、教科とのつながりの薄い総合的学習になってしまっていることが多い（教科で学んだものを活用する場面があるとよい）。
- 各教科の内容や進捗が共有されていないため、どの教科でどんなことを扱っているのか把握できていない（教科間の連携の薄さや知識の活用可能性の低さ）。
- 現役教員の実感として、総合的学習の大切さ、必要性を感じている人（特に教員）が少ない。
- 地域とつながりたくても、どこにどのように相談してよいかわからない。

自己紹介の様子。教員だけでなく、地域教育コーディネーター、企業の方など様々な立場の方が参加し、多様な視点での検討が行われた。

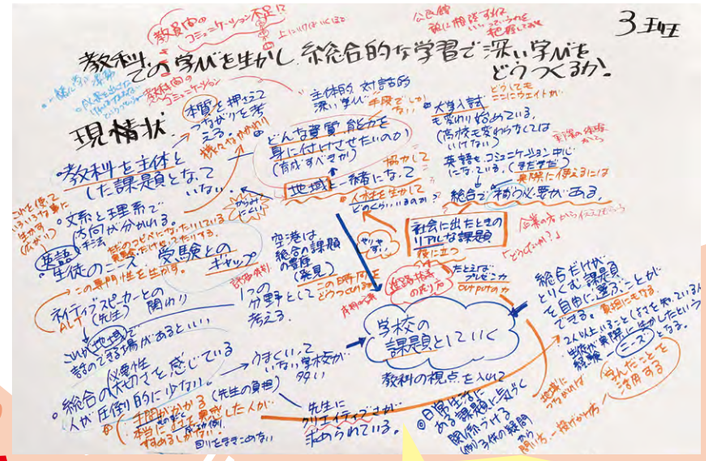
冒頭では総合的学習の可能性・重要性を再確認した。総合的学習は取り組む課題を自由に選べるので、教科の学びを補うことにもつながるという意見も。

Ideal

理想の姿

発表の様子。特に現場の教員からは教科と総合を結びつけるヒントを得ることができたとの声も。

- 目の前の児童生徒に育成すべき資質・能力が明確になっており、それに基づいたテーマや課題に対する取り組みを総合的学習の中で行う。
- 児童生徒が実際に地域や社会で活かしたくなるような授業内容である。
- 日常生活にある課題やその本質に気付き、すでに身につけている自分の知識や考え方と関係づけて解決に向けて考えることができる。
- ひとりではなく、複数の教員で総合的学習の充実に取り組む。そしてそれを学校の課題としていく。
- 地域、社会で実際に生じているリアルな課題に教員も含めみんなで取り組む。



今の教員は教科の専門性だけでなく、クリエイティブさが求められているという指摘もあった。

Break the status quo

ポイント

Point 1. 総合的学習の重要性を学校全体で再認識する

働いていくうえでの力、社会の中で生きていく力は総合的学習の中でこそ育てられるということを今回の論議によって再確認した。「この話合いを学校の中でやれたらよい」といった意見もあった。総合的学習を見直す機会を、それぞれの学校や地域で設けることが求められる。

Point 2. コミュニケーションをとりやすい環境をつくる

公民館など相談にのってもらえるところや人を明確にしておき、地域で話し合う場を設けること。教員間でどんな資質・能力を身につけさせたいか話し合い、協力すること。児童生徒と一緒に学ぶという姿勢で取り組むことという具体案が出された。

Point 3. 授業の中で、教科の本質を押さえて社会とのつながりを考える

教科が実社会でどんな部分に活用できるか、どんな場面と結びついているのかなど、社会と教科のつながりを授業の中で意識することが一層求められる。総合的学習の中ではそのつながりを意識しながら、育みたい資質・能力の育成に取り組む。

Theme 2

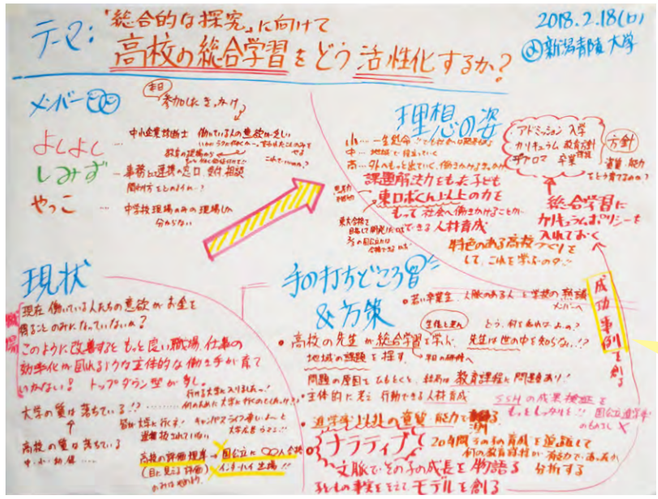
総合的な探究に向けて、高校の総合的学習をどう活性化していくか

次期学習指導要領において、高校の総合的学習は各教科等の見方・考え方を総合的・統合的に活用することに加え、自己のキャリア形成の方向と関連づけながら、生徒が自ら問いを見出し探究できる力の育成を目指した「総合的な探究」として位置づけられる予定である。

このセッションでは、大学教員や事務職員、中小企業診断士、中学校教員らが集い、それぞれの立場から、高校の総合的学習に寄せる期待と再活性化に向けたアイデアを共有した。

Present situation 現状

- 高校の学校評価基準が進学率や就職率に偏っており、総合的学習の価値や意義が現場の教員に理解されづらい。
- 受験学力が重視され、教員も地域社会と繋がる機会が少ないため、総合的学習が上手く機能していない。
- 高校卒業段階で将来のキャリアプランや学ぶ目的が定まっていない生徒が多く、社会に出ても主体的な働き手・学び手に育っていない現状がある。



「やっぱり、高校でも教員自身がワクワク楽しくなるような総合的学習をつくらないと！」

高校が地域とつながるには「育てたい生徒像」を丁寧に共有することが必要なのではないかとの意見も。

Ideal 理想の姿

「やらないことを決める」という発想をもつと、多忙化解消に繋がるのでは。

- 大学入試改革に伴い、高校の学校評価基準を単に大学進学率に求めるのではなく、主体的に学ぶ生徒をどれだけ育めたかという視点に転換していく。
- そのために各高校は「特色ある学校づくり」を進め、その中核に総合的学習の時間を据えることで、総合的学習の見直し＆活性化を図る。
- 具体的には、３カ年で育む生徒の資質・能力とその育成方針を明確にし、地域や保護者と共有する。
- 小・中学生よりも知識・経験が豊富である高校生は、地域の一員として大人と共によりリアルな地域課題を探究し、学びや成果を地域に還元することで、地域とwin-winな総合的学習を展開できる。

「まずは卒業生に声をかけ、社会との接点を見出すこともポイントの１つでは」とのアイデアも。

Break the status quo ポイント

Point 4. 高校教員の学びの機会をつくる

高校教員が地域・社会の課題や今後の総合的学習の在り方を学び、総合的学習の再活性化を自分ごととして捉える機会をつくる。

Point 5. 高校の学校評価を転換する

生徒の資質・能力の育成を軸に学校を評価する、新たな評価の在り方を模索する。
例）幼小中～高校で生徒の成長を物語るポートフォリオ的な評価の実施。

Point 6. 成功事例をもとに、再活性化のモデルを創る

県内の高校で実践を共有しながらモデルを創り、広めていく。地域と教員がポジティブなフィードバックを交わし合う中で、教員の自己肯定感も高める。

Theme 3

総合的学習を核に小中高連携を進めていくために必要なことは何か

学校間連携によって地域の物的・人的資源を共有することは、総合的学習をリファインするうえで必要不可欠である。コミュニティ・スクールの設置も進む中、そうした情報を共有する場の存在は、ますます重要になっていくと考えられる。

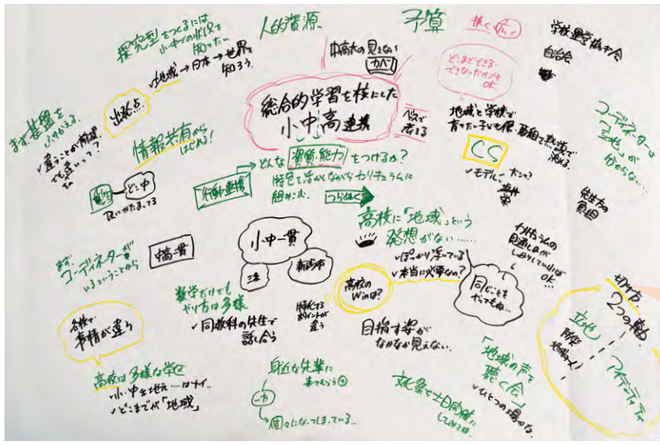
このセッションでは、現役の教員、地域教育コーディネーターが集まり、総合的学習をより充実させるための「小中高の学校間連携」について検討した。

Present situation 現状

●中高(大)の間に、心理的にも、物理的にも連携を妨げる分厚い「壁」があるように感じる。

●学校間(縦)の情報共有ができない。情報共有をする場がない。

●「地域」とはどこからどこまでを指すのか学校によって共通認識がなく、曖昧なままになっている。



「小・中の連携は進んでいるが、中・高・大には『見えない壁』のようなものがある。なぜだろう？」

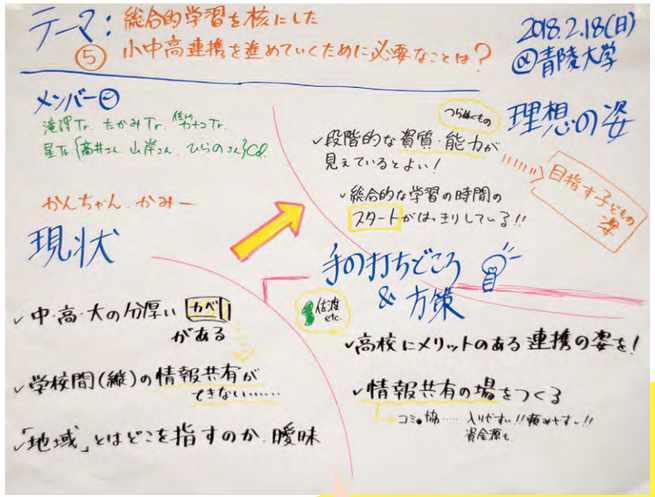
高校ならではの話題も。「高校は多様な学区から生徒が集まっているから、どこが『地域』か定めにくいよね」

Ideal 理想の姿

「そもそも、高校は地域に開かれる必要はあるのか？」という声も。「高校生が地域で学ぶこと」が目的化する危惧もあるようだ。

●小中高でそれぞれ、児童生徒に身につけさせたい段階的な資質・能力（目指す子どもの姿）が見えている。

●総合的学習が「いつ、どのように、誰によってスタートするか」がはっきりしている。



見えない壁を打破するのは「情報共有」。「顔と顔を合わせて、多様な人々が交流できる場が必要」という共通認識が得られた。

Break the status quo ポイント

Point 7. 高校にメリットのある連携の姿・モデルを確立する

「そもそも高校では、地域に開かれた学習は必要か？」という問いが示された。「児童生徒に身につけさせたい資質・能力」が先であって、「活動あって学びなし」になっては本末転倒になってしまう。高校にとってのメリットをよく考え、そのうえで総合的学習の内容を決定していくことが大切である。

Point 8. 学校間(縦)で情報共有ができる場をつくる

地域の物的・人的資源など、各学校の実践で蓄積されたリソースを共有できる場が必要である。特に、コミュニティ協議会などは、情報を共有する場として、教員と地域（教育）コーディネーターとが交流・連携し合う場として捉えることもできるのではないか。

Theme 4

教員と地域（教育）コーディネーターでどう役割分担していくか

地域と学校の協働を推進するために、新潟県内では地域（教育）コーディネーターの配置が進んでいる。岩﨑教授の質問紙調査によると、役割分担が明確で教員と地域（教育）コーディネーターのコミュニケーションがとれている学校は総合的学習も活性化しているという結果が出ている（pp.3-6）。

このセッションでは、総合的学習をリファインするために、教員と地域（教育）コーディネーター・地域の協働の在るべき姿や役割分担の進め方を検討した。

Present situation 現状

- 風の人である教員には、地域での課題発見や構想を練るためのエネルギーと時間の確保が必要である。
- 前年度踏襲が基本で新しいテーマや課題は扱いにくく、新しい総合的学習の時間の単元を作り出すのは困難である。
- 教員と地域（教育）コーディネーターが総合的学習の授業や構想を一緒に考えるには時間的、精神的な余裕がない。
- 地域（教育）コーディネーターが教員の下請けとなっており、頼まれたこと以外はやりにくい雰囲気がある。

子どもたちに身につけさせたい力をもっと明らかにした上で役割分担できるとよいと理想を語った。

NPOや公民館職員からは、社会教育施設や専門性を持ったNPO団体などをもっと活用してほしい、という意見も。

Ideal 理想の姿

小中高校の教員、地域教育コーディネーター、公民館やNPO・地域の関係者など13名が集まり対話を重ねた。

- 年度当初に、児童生徒に身につけたい力と現状を教員と地域（教育）コーディネーター・地域が共有する（小学校６年間、中学校３年間、高校３年間における総合的学習を核とした成長の見通しを持つ）。
- 総合的学習を計画・運営するためのプログラムや教材、人材などベースとなる情報やシステムが整備されている（そのシステムを地域（教育）コーディネーターが担う）。
- そのうえで、総合的学習の構想を教員、地域（教育）コーディネーター、地域住民で一緒に考え、共通理解のもとで教育活動を担う。
- 地域に開かれた学校をつくる核は、総合的学習である。管理職のリーダーシップのもと、学校一体となって総合的学習を推進する。

地域（教育）コーディネーターの悩みをどう解決するかで論議が白熱。高校の管理職も地域（教育）コーディネーターの必要性を訴えていた。

Break the status quo ポイント

Point 9. ふりかえりを一緒に実施する

書類上のふりかえりだけでなく、教員と地域（教育）コーディネーター・地域が今年度の総合的学習のふりかえりや評価を一緒に行う。

Point 10. 既存の単元を発展させる

地域（教育）コーディネーターがいきなり新しいテーマを提案するのではなく、すでに実践している総合的学習の発展の可能性や次につながるアドバイスを教員にする。

Point 11. 地域教材や情報を蓄積する

授業での教材やふりかえりでの情報を地域（教育）コーディネーターが蓄積しておき、新しく赴任してきた教員にも教材や情報を活用してもらえるようにする。

Theme 5

学校と地域がwin-winになる総合的学習をつくるために、どんなプロセスが必要か

　このセッションでは、よりよい総合的学習をつくるために不可欠な学校と地域の関係づくりに着目し、特にそのプロセスについて論議した。

　教員と地域（教育）コーディネーターが熟議をする機会は、日常ではあまりない。このセッションでは、教員と地域教育コーディネーターが実際に問題を共有することで、お互いの現状を分かち合うことができた。こうした話合いの場を持つことがwin-winの関係づくりの第一歩であるということが、大きな気付きとなった。

Present situation 現状

●学校と地域それぞれの課題が分からず、winの定義がお互いに分からない。
●学校からの一方的な依頼になりがちで、学校と地域に熱量の差がある。
●予算に限りがあり、出所もよく分からない。
●地域（教育）コーディネーターは担当の教員としか関わることができず、学校内の決定権者が分からない。
●教員は、毎日何かに追われている。
●地域の中には地域愛、郷土愛を持つ人々がいる。

早速、お互いに褒め合う場面もあった。担当以外の教員の名前も覚えたいという声も。

Ideal 理想の姿

●学校と地域の課題の一致ができており、お互いに頼り合えるwin-winの関係性を結んでいる。
●学校と地域、そして子どもたちが地域の理念を共有している。
●地域の未来が子どもたちにとって自分ごとになる。
●教員（決定権者も含めた）と地域（教育）コーディネーターが話し合い、決定できる場がある。
●キャリア教育を地域（教育）コーディネーターも担うことで、教員がほっとしている。

win-winの可視化・数値化も大きなポイントとして挙げられた。

Break the status quo ポイント

Point 12. 地域愛を持った元気な大人を発掘する

地域愛、郷土愛を持つ人材を見つけ、地域（教育）コーディネーターとして携わってもらう。地域のキーマンを見つけることで、より多くの地域の元気な大人たちとつながることができる。

Point 13. 学校と地域が話し合う場を設ける

教員と地域（教育）コーディネーターが面と向かって話し合う場を設けることで、共通の課題を見つけやすくする。単年ではなく、お互いに中期的に携わることで、子どもたちにとっても地域の未来が自分ごとに変わってくる。

Point 14. 地域(教育)コーディネーターもキャリア教育を担う

地域（教育）コーディネーターが、地域の課題意識や危機感に基づいた学習内容の提案をする。キャリア教育を地域も担うことで、教員は安心して子どもたちに集中できる。お互いに信頼、感謝し合う関係づくりも欠かせない。

Voice

フォーラム参加者の声

総合的学習をリファインするためには、教職員がもっと総合の意味を理解する必要ある。

教職員、地域教育コーディネーター、保護者それぞれの立場での思いを表に出し、何が問題で何が必要か、何が欲しいのかを明確にできた。

小・中・高の教員の悩みだけでなく、地域教育コーディネーターの方の悩みもお聞きできた。

それぞれの立場による役割は違うにしても、次世代の子どもたちをどう育てるかという共通の目的にむかって考えあう仲間がいるということが分かって、自身のモチベーションが上がった。

気付き・学び

見えてきたこと

- 小中高の「総合的学習」の連携は「行動連携」の前に「情報連携」が必要である。
- 学校と地域が win-win であるために、学校が求めるもの、地域が求めるものそれぞれを、お互い顔を合わせてよく話し合い、知ることが大切だ。
- 大学の先生方が小・中・高で行われていることを知らない、高校の先生方が小・中・大で行われていることを知らない現状は、変える必要があると思う。
- すぐ見える結果や数値も大切だが、中期的、つまりあとからじわりと分かる、利いてくる教育の成果も期待したい。
  いろいろな立場の方と協働し、お互いに頼り合う事で、総合的学習を支えていきたい。

現場に活かしたいこと

- 地域の声を聴く機会を意図的・計画的につくっていきたい。
- 教科の本質をあらためて問い直し、そのうえで社会とのつながりを見出していく。
- 明日にでも、地域（教育）コーディネーターさんに相談・共有したい。
- 地域の中の連携できる人、団体等を整理し、人材バンク化できるようにしていきたい。
- 高校が孤立している感じで、お互いのことが分からないことだらけだ、という感想をもった。自分から学校の外に出ていくことが大切だと思ったので、機会をみつけて積極的に行動していきたいと思った。
- 教員自身がクリエイティブに実践したことを、児童生徒間や学校内で完結させないで、どのような総合的学習が学校で行われているかを地域も知ることが大切だ。
- 地域の新たな学習素材・テーマを発掘したい。
- 校務分掌を工夫して、年々総合的学習がつながるように職員の編成を行っていきたい。
- 子どもたちの将来に何が必要なのか、教員と保護者が話し合い、共有する場を設定する。

おわりに

フォーラムには、子どもが好きで、学校が好きで、地域が好きな方々が集まり、立場や年齢の違いを超え、総合的学習を“肴”に教育を熱く語り合いました。

いかがでしょうか。総合的学習を再活性化（リファイン）するモデルやヒントが、見つかりましたか。

最後になりましたが、質問紙調査や面接調査に協力くださった先生方や地域（教育）コーディネーターの皆様、授業を見せてくださった先生方、研究環境の整備に力を貸してくださった皆様、そしてフォーラムの運営や本冊子の製作を支援してくださった特定非営利活動法人みらいずworksの皆様や株式会社博進堂の皆様に感謝申し上げます。総合的学習は、人の輪を拡げることを実感しています。（岩﨑 保之）

自分のできるところから
始めよう！

Thank you for coming !

「総合的な学習の時間」をリファインして、
学校・地域をもっと元気に！

科研費 KAKENHI
本研究は JSPS 科研費 JP15K04518 の助成を受けたものです。
This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP15K04518.

「総合的な学習の時間」をリファインしよう！
―学校・地域をもっと元気にする 14 のポイント―

2018 年 3 月 20 日発行
編著者　総合的学習リファインフォーラム実行委員会
発　行　株式会社博進堂

©2018 Executive Committee for Integrated Studies Refinement Forum, Printed in Japan
ISBN978-4-938137-67-0 C0037